

JICA ボランティア デイア

SVニュース 第18号

秋季公開講演会と定例会を開催

千葉県国際課 西織哲大 国際交流協力室長による「千葉県国際課の事業、取り組みについて」と同室 宮崎順紀 副室長による「ラオス・ヴィエンチャン都水環境改善事業」と題する講演がおこなわれました。引き続き当会定例会が開催されました。

恒例の公開講演会が当会、JICA地球ひろば共催、千葉県、千葉市の後援で十二月一日(土)千葉県国際交流プラザにて開催されました。今回は千葉県国際課より二名の講師をお招きしました。



西織 講師

西織講師は平成二十三年四月より総合企画部国際課の国際交流協力室長に就任、国際交流および国際協力に関することを担当しております。当日は国際課の施策の方向性と事業取り組みについて講演されました。外国人県民に

も暮らしやすい地域づくり、国際交流・国際協力、海外への千葉の魅力発信など、国際課業務の重要性を認識させるものでした。



宮崎 講師

宮崎講師は豊富な経験を駆使して、千葉県が行う国際協力事業を担当されております。当日は千葉県のラオス・ヴィエンチャン都に於ける水環境改善事業の内容を報告されました。お二人の講演要旨を本誌の第二面に掲載してありますのでご覧ください。

平成二十五年通常総会日程
日時 五月十六日(木)
十三時~十六時
引き続き懇親会を予定
会場 アミュゼ柏 四階



講演会 会場風景

公開講演会に引き続き、同会場で当会定例会が開催され、事業現況の報告と新会員の紹介が行われました。来賓と会員の約三十名が参加され、盛会でした。会員の方は定例会記録をウェブページでご覧頂けます。

西織、宮崎両氏に加え、写真の三氏を来賓にお迎えしました。



JICA地球ひろば 渋谷 明日香氏



JOCV千葉OB会 浜田 眞一氏



海外協力隊を育てる会 田中 保蔵氏

散会后近隣の「美弥和」にて懇親会が開かれ、活発な情報交換の場となりました。



長年勤めた国際協力機構を早期退職し、念願の教育現場へ転身、大学の国際化教育に携わる問題も見えてきた。

『グローバル化』と言うキーワードが実業界、経済界から聞こえはじめて間もなく教育現場に怒涛の様に『グローバル化教育』が求められてきた理由は、『日本唯一の資源は人材』と言われてきた我が国にとっては自明であり、寧ろ、気が付くのが遅過ぎたのではないかとすら思える。

日本の国際化教育への苦言と提言

麗澤大学 外国語学部教授

成瀬 猛

人の育成には時間を要し、「今必要だから、今直ぐに育ててくれ...」が無理であることに加え、更に深刻なのはグローバル教育が実践学であるべきことを理解出来ない教育行政と教育現場環境、特に実践的グローバル教育を創造し、その実施を担える教育者が極めて少ないことを敢えて挙げることが出来る事である。

単刀直入に言えば、人材の国際化が早急に求められている今、大學生に向かい合う教育者に相応しい資質と要件とは何かを問い直すところから始めなければ、抜本的な教育改革などは難しく、ただ、「時すでに遅し」ではなく、現に存在しているフィールドと人材を活用し、行政・大学・国際協力機構(JICA)がグローバル化教育に取り組み、必要とされる日本人材の再生も夢ではない。

戦略の一つは、JICAの活用、青年海外協力隊経験者とシニア海外ボランティア経験者の活用だと思ふ。私はまだJICAの職員だった頃から『JICA大学』と言う構想をよく口にしていた。一言でいえば、JICAと大学が連携し、大学の然るべき学部内に国際人材養成学科(例えば)を設け、国際協力に必要なノウハウはJICAから講師陣を派遣して専門講義を行い、一、二年度にはJICA事業現場へのスタディツアーおよび海外でのボランティア実習を必須とし、三、四年度は専門ゼミに於いては、プロジェクトの立案をJICAの事業現場を事例にして、実際に現地に行って実地で学ぶのである。大きな夢は兎も角、出来る事からやってみようかと思ふ、麗澤大学の中に『グローバルひろば』と銘打ち、「国際化教育の見える化」を図るスペースを確保した。真に国際人を目指す学生に、正課外で国際協力特別講座(青年海外協力隊千葉OB会や千葉県JICAシニアボランティアの会と連携した特別講座)や学生達が企画した海外スタディツアーをJICAの協力を得て実施しようとしている。この試みは、語学留学以外の国際協力実践教育にはあまり関心がなかった大学にも変化をもたらしつつある。

今ならまだやれる余地は残されていると言つて可い。

まずまずグローバル化教育の充実が求められる中で、日本を挙げて取り組まなければならない課題であり、組織論的な小さな枠組みで考えては埒が明かないと考

用、青年海外協力隊経験者とシニア海外ボランティア経験者の活用だと思ふ。私はまだJICAの職員だった頃から『JICA大学』と言う構想をよく口にしていた。一言でいえば、JICAと大学が連携し、大学の然るべき学部内に国際人材養成学科(例えば)を設け、国際協力に必要なノウハウはJICAから講師陣を派遣して専門講義を行い、一、二年度にはJICA事業現場へのスタディツアーおよび海外でのボランティア実習を必須とし、三、四年度は専門ゼミに於いては、プロジェクトの立案をJICAの事業現場を事例にして、実際に現地に行つて実地で学ぶのである。大きな夢は兎も角、出来る事からやってみようかと思ふ、麗澤大学の中に『グローバルひろば』と銘打ち、「国際化教育の見える化」を図るスペースを確保した。真に国際人を目指す学生に、正課外で国際協力特別講座(青年海外協力隊千葉OB会や千葉県JICAシニアボランティアの会と連携した特別講座)や学生達が企画した海外スタディツアーをJICAの協力を得て実施しようとしている。この試みは、語学留学以外の国際協力実践教育にはあまり関心がなかった大学にも変化をもたらしつつある。

公開講演会講演要旨

千葉県国際課の事業、

取り組みについて

西織 哲大氏

成田空港で世界と結ばれている千葉県では、さまざまな施策を展開している。

外国人県民にも暮らしやすい地域づくり

外国人県民が地域の一人として安心して暮らせるよう、多言語による情報提供や電話相談など、多文化共生社会づくりに努めている。特に、昨年度からは、災害時の外国人の支援の実践的な訓練も含めた「災害時外国人サポーター養成講座」を実施している。

国際交流・国際協力



デュッセルドルフ「日本デー」会場内 千葉県PRブース

ドイツ・デュッセルドルフ市とは、経済、文化、スポーツ

ツ等の交流を民間主導で行っている。同市内で開催されている「日本デー」には、今年も知事も参加し、千葉県の魅力をアピールした。



ウィスコンシン州使節団と県内団体との交流

姉妹州の米国・ウィスコンシン州とは、隔年で相互に使節団を派遣しており、平成二十四年九月には民間団体が主体となり使節団の受け入れを行った。

さらに、近年はアジアとの経済交流も活発に展開しており、台湾やタイで観光や県産品のトップセールスを行っている。

世界に向けた千葉の魅力発信

昨年度から、千葉県の魅力を海外に発信する取り組みを強化している。県内在住の外国人を魅力発信大使（チーバくん大使）として任命し、ブログ等で日常的な情報を発信していただいているほか、各

国のメディア海外特派員等に千葉県の魅力を紹介するなど、積極的に取り組んでいる。



チーバくん大使による千葉の魅力体験（千葉市美浜園）

今後とも世界に開かれた県として様々な取り組みを進めてまいりたいので、皆様の御理解・御支援をよろしくお願ひしたい。

ラオス・ヴィエンチャン都

水環境改善事業

宮崎 順紀氏

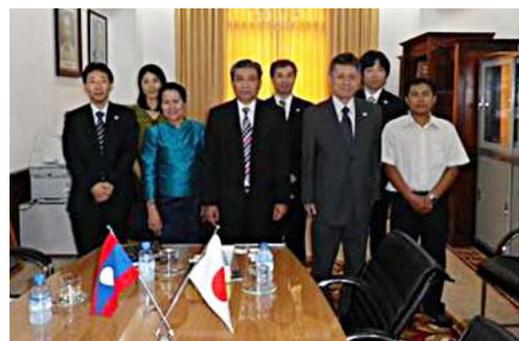
千葉県では、平成二十三年度までの五年間、ベトナムのハノイ市において、JICAの草の根技術協力事業の枠組みによる国際協力活動を行ってきたところであるが、平成二十四年度からは、隣国ラオスの首都ヴィエンチャンにおいて、(財)自治体国際化協会(CLAIR)の「自治体国

際協力促進事業(モデル事業)の枠組みにより、水環境改善のための国際協力活動を展開している。



ラオスの地図

ラオスは、人口約六百万人の小国、国連の定める後発開発途上国(LDC)に属しているが、今後、急速な都市化に伴う環境汚染が懸念されており、千葉県としても、本県が有する水環境保全に関する技術や知見をラオスの水環境



専門家のラオス派遣

改善に生かそうと活動に取り組んでいる。

具体的な取り組みとしては、七月と十一月の年二回、県の専門技術職員をヴィエンチャンに派遣し、同都の水環境管理部職員を対象にした水質分析やモニタリング等の技術指導を行っており、今後は、ヴィエンチャンから研修生三名を本県に招聘して、県内施設で技術研修等を行う予定である。



現地での水質分析

「自治体国際協力促進事業(モデル事業)」の助成は最長二年であるが、県としては、その後も事業を継続させていきたいと考えており、引き続きJICA等の関係機関とも連携・協力しながら、より良い活動として参りたい。

第十四回帰国報告会開催

厳冬の気温の中、二月十六日(土)午後一時半より三時間に亘り、第十四回帰国報告会が当会とJICA地球ひろばの共催、千葉県の後援で柏市のアミューゼ柏プラザにおいて開催されました。



報告者(左より)篠原、川奈部、高橋、田畑の各氏

来賓として柏市地域づくり推進部 須藤勝己氏、NPO法人柏市国際交流協会 小菅あけみ氏、青年海外協力隊千葉OB会 浜田眞一氏のご出席がありました。参加者は、一般聴講者を含め約七十名でした。

加藤幹事の司会で始まり、JICA地球ひろば 長谷川敏久氏と当会 山本会長の挨拶のあと、四名の帰国者が順次、報告講演を行いました。

報告内容は、基本的な活動成果の他に多数のスライドを用いて現地の風土や人々の生活ぶりが紹介され、参加者全員興味深く聴講しました。

来場者のアンケート調査では、現地活動の苦勞、工夫が参考になったと言う感想が多く見られました。

報告の要旨は次の通りでした。(文責編集担当)

“Ofa Atu” トンガ語の “love you”

川奈部くに子氏

国際協力教育に関心が有り、JICAの現職参加派遣に合格したが、諸般の事情で断念した。

二〇一〇年に早期退職してトンガ教育・女性・文化省教育課程開発部に赴任、日本語教育の指導に当たった。

トンガでは一九八六年に日本語教育が始まった長い歴史があるものの、中等教育終了の試験の作成や教科書の改訂等の基盤的実務をシニア海外ボランティアに依存し続けている。赴任期間中はカウンターパートが不在で、後任者のため強く要請した。

帰国後も地元で国際教育のボランティア活動を続けている。JICAの社会還元事業にも積極的に参加したい。

フロンペン市教育・青年・スポーツ局における活動報告

篠原温雄氏

二〇一〇年三月から二年間フロンペン市の教育局に赴任、教育政策の調査立案とプロジェクト遂行にあたった。フロンペン市内の小学校の就学率は九十九・九割だが留年や退学が六割を超える。

授業は二部制、生徒に一年間貸与される教科書の摩耗補充が困難等、解決すべき課題が多い。ODA建設プロジェクトによる小学校校舎が完成して中川文科相が学校視察に来られたこと、草の根・人間の安全保障無償資金協力による小学校校舎が落成して記念式典で感謝状とメダルが授与されたことがシニアボランティア活動の記念となった。

大連市でのIT技術者教育活動

高橋知廣氏

早期退職して二〇一〇年三月大連市日中友好人材育成センターでのITプロジェクト管理技術者育成のために赴任した。しかしセンター運営について日中間に思惑のずれがあり、実質的に自分の発案によるゼロからのスタートをする事になった。

無償セミナー開講で活動をPRしつつ八講座を開発、日中両国語の研修資料を作成して集客に努めたが、有償講座の成立は容易ではなく、残念

ながら時間切れになって初期の目的を達成できたとは言えない。

中国へのODA提供に批判はあるが、人と人との草の根レベルでの交流と信頼関係の構築が互恵の基礎であり、ボランティア活動の重要性は今後も変わらないと実感した。

パラグアイで感じたこと

田畑成章氏

二〇一〇年十月、パラグアイ工業連盟の品質生産センターで経営管理指導員の育成、コンサルティング力強化を担当した。

パラグアイは農業中心で製造業は未熟な段階にあり、中小企業の育成が課題である。

国民性は勤勉で民間の人達はまだめで良く働き、金銭的には不十分でも豊かなプライベートループを送っており、ギャロップ調査で世界で最も楽天的民族にランクされた。

その反面パブリックの側面は貧弱で、公務員は一般に非効率・無責任の傾向が強く組織力の発揮が難しい。二年間の生活と活動でその二面性が強く印象に残った。

ブラジルの存在感、征服者と被征服者について等は二年間の活動を通じて生活をした人でないとは分らない現実の厳しさを実感させられた。

ウェブサイトについて ウェブマスター 白鳥貞夫



当サイトビジター

020000

当会ウェブサイトのアクセスが二万件を超えました。当会ウェブページ左下にカウンターが表示されています。

これは二〇〇六年十一月一日に当会ウェブサイトが運用開始されて以来の累積アクセス数をリアルタイムで示しています(IPアドレス単位で一日一回をカウント)。

このカウンターが二〇一三年二月五日に二万件を超えました。最初の一件に到達するまで三年九カ月を要しましたが、次の二万件到達までは二年六カ月でした。最近は一、二十件を超える日も多く、このペースで進むと二年足らずで三万件に達すると思われる。

それだけ多くの方が閲覧・利用されているわけで、会員の情報共有と会の活動PRの場としてのウェブサイト的重要性は今後もますます高まるでしょう。

皆様のご活用とご投稿を期待します。

公民館・大学などへの出前講座



6

● 市原市有秋公民館

昨年11月30日(金)午前、有秋公民館において、横田勝徳会員による「モンゴルにおけるボランティア体験－任務、交流、自然」と題する講演が、60歳以上の聴講者26名を対象に行われました。横田会員より、モンゴル全般の紹

介とともに今後の経済発展の可能性、自身の技術指導やエピソードなども織り交ぜた話がありました。また、草花がいつべんに咲き誇った写真も示し、聴講者を感嘆させたりもしました。

=写真6



7

● 市原市五井公民館

昨年12月14日(金)、五井公民館において、60歳代の館の会員75名に対し、当会の佐藤 聡会員による「JICAシニア海外ボランティアに挑戦して」と題する講演が行われました。佐藤会員はモンゴルの地勢や人々の生活、配属先の火

力発電所での任務の状況、職場スタッフとの連携や心のふれあい、過ごした2年間で氏自身にとってどんな意味を持つものであったかなどを4部に構成し、豊富な写真資料を用いて話を進めました。=写真7



8

● 八街市中央公民館 (1)

昨年12月19日(金)、生きがい短期大学第2学年「世界に目を向けよう②」で学生20名を対象に、津田正臣会員による「ヨルダンにおける技術移転と生活体験」と題する講演が行われました。津田会員はイスラム社会としてのヨルダン

の現状やシニアボランティアとしての活動概要を紹介しました。また、年配者を敬うヨルダンでは、飽食の日本が忘れかけている大切な事柄を思い出させてくれ、教えるよりも学んだことの方が多かったとの話をしました。=写真8



9

● 酒々井中央公民館

本年1月23日(水)、公民館研修室において、タウンカレッジ(住民高齢者)の20名を対象に、坂出直哉会員による「定年後の第二の人生について考える～パプアニューギニアにおける“医薬品在庫管理”技術移転の実務経験と現地の生活体験について」と題する講演が

行われました。坂出会員は「外国に住むと日本との文化の違いが良く分る」と感想を交え講義を行いました。聴講者に対し自らがチャレンジする事を強く推奨したことが、聴講者と主催者に好評でした。=写真9



10

● 八街市中央公民館 (2)

本年2月7日(木)、八街中央公民館会員の16名を対象に田中忠昭会員による「世界に目を向けよう③：日本人から見たベトナムの印象と紹介」と題する講演が行われました。ベトナムの文化・風俗・習慣および一般事情について体験を詳細な資料を用いて説明するとともに、

自身の豊富な体験をも交えて講演を行いました。聴講者は、アジアにある友好国としてのベトナムを「国際理解」することができ、自分たちも一度、ベトナムへ行ってみたいとする気持ちを強くしたようです。

=写真10



11

● 第4回 麗澤大学連携授業

昨年11月21日(水)午前、外国語学部国際交流・国際協力専攻の1年生58名を対象に、大西輝明会員による「環境意識に関する大学生の国際比較－ヨルダン、コスタリカ、ネパール、日本」と

題する授業が行われました。大西会員は4カ国で調査した学生の意識や価値観を比較し、途上国では若者に対する教育が価値観を培う上で重要であることを話しました。=写真11



12

● 第5回 麗澤大学連携授業

昨年11月28日(水)午前、前回に引き続き、同学部の学生52名を対象に、品川洋之助会員による「パラグアイの地質とシニアボランティア」と題する授業が行われました。品川会員はパラグアイの地理、地質、鉱物資源、水資源、

経済状況などを紹介し、自身のミッションとしての各種の鉱物探査結果の話もしました。また、同国の日系社会に触れ、農業移民の果たした役割や日系大使についての説明も行いました。

=写真12

出前講座実施報告（2012年9月～2013年2月）

当会が国際理解教育（開発教育）活動を開始してから7年目を迎えています。この活動の趣旨と精神は広く社会に理解され、出前講座の依頼は年ごとに増えてきま

した。小学校の出前授業や大学との連携授業も新たな展開を見せています。今後も前向きの姿勢で国際理解教育活動に取り組み、私たちが海外ボランティアで得た体験

や知見を社会に還元したいと考えております。出前講座の講師派遣に関しましては、下記URLから『出前講座ご提案』をご覧ください。

小学校などへの出前授業

● 柏市立柏の葉小学校

昨年10月3日(水)、柏の葉小学校国際交流室において、加藤哲男会員による「南米の国ボリビア」と題する授業が、3年生2クラス42名と4年生2クラス41名を対象に、2度にわたって行われました。加藤会員はボリビアの帽子、肩掛けカバンを着用し、時おりマテ茶を口にしながら対話スタイルで授業をす

すめ、ボリビアの地勢、子供の暮らし、大人の仕事、食べ物、お祭りなどの写真を多用して現地事情を説明しました。また、自身の現地での活動によって日本の技術を開発途上国で役立てることができたことや、友好を深めたことなどの話しをしました。=写真1



● 柏市立豊小学校

10月30日(火)、豊小学校における国際理解教育の一環として、6年生2クラスを対象に、白鳥貞夫会員による「幸福な国バヌアツを知ろう」と題する授業が行われました。白鳥会員は多くの画像を使い、適宜クイズなども入れつつ、仕事の紹介、現地の生活などの話

をしました。児童は、お金がない、時間がない、約束がないなどの日本とは違った話に興味を覚えたらしく、熱心にメモを取っていました。11月の豊小学校の文化祭では、生徒各自がこの授業で感じたことを文書で発表しました。=写真2



● 柏市立第三小学校

本年1月23日(水)、第3小学校において、6年生95名（2クラス）を対象に、中村時夫会員による「パラオの素敵な人々」と題する授業が行われました。生徒は日米開戦に関する事前学習を行ってから、この授業に臨みました。

中村会員はパラオ教育省での指導科目である数学カリキュラム作成の話から、なぜパラオでは外国の援助が必要なのかまでを説明しました。事前学習が効果的な授業効果を呼んで、スムーズな授業となりました。=写真3



● 柏市立田中北小学校

2月12日(火)午前、田中北小学校において、黒田昭太郎会員による「マレーシア・民族共存の親日国」と題する授業が6年生16名を対象に行われました。黒田会員は冒頭ほぼ3分の1の時間を費やして、JICAによる途上国援助や互恵関係樹立の意義、平和維持との関連

などについて説明しました。ついで、マレーシアの民族的多様性や宗教、古代から現代までの歴史、マハティール元首相の下での近代化の歩みや日本との関係について説明し、中味の濃い授業となりました。=写真4



● 学習塾ネクスファ柏教室

昨年12月7日(金)午後、表題塾教室において、竹花 晃会員による「ネパールの博物館の運営」と題する授業が、塾生である小学校低学年4名と塾スタッフに対して行われました。竹花会員は小学生向けのスライドを作成し、授業の進め方も対話方式をとるなど、飽きさせない講話を行いました。お札、国旗、着物、アンモナイト化石、現地の子供たちの写真なども持参して示し、同学習塾が掲げる児童の能力開発の目

的に沿う授業を行いました。なお、表題塾は東大高齢社会総合研究機構、柏市、UR都市機構とのパートナーシップ事業により開設された学習塾で、児童が自分で考え、主体的に行動できる力を身につけることを主眼においたプログラムを実施しています。今回の授業は、外部講師によるアクティビティブログラムの一環として当会に講師派遣依頼があったものです。=写真5



フェスティバル参加

新浦安祭り

昨年九月八日(土)、九日(日)の両日、新浦安駅前プラザマーレにおいて恒例の新浦安祭りが開催されました。スタンプラリーの押印所ともなったプラザマーレの二階にある浦安市国際センターは、主催者によれば二千名もの子供たちで大賑わいとなりました。両日ともセンター内では国際協力活動グループのパンフレットやチラシ類を展示し、訪れた人々が自由に持ち帰りのできる設定としていました。当会もこの企画に参加し、SVニュースや出前講座、会の紹介チラシなどを展示、配架しました。



会場の展示物コーナー

スタンプラリーが一段落した午後には多くの熟年者が興味深そうに展示物を見て、当会のチラシなどを持ち帰っていました。

KIRAまつり

昨年九月二十二日(土)午後、柏市国際交流協会(KIRA)主催の「KIRAまつり」が柏市立柏第一小学校体育館で開かれました。KIRAは民間国際交流組織として幅広い活動を行っている団体です。当会はブースを開設して参加、JICAボランティア活動のPRを行いました。



説明中の黒田、加藤、羽田各会員

会場には約三百名の参加者が集い、柏市長の挨拶に続いて小学生のプラスバンド演奏や在住外国人団体のダンスなど多彩なパフォーマンスで賑わいました。参加者は海外ボランティア活動に関心の高い人が多く、当会ブースでは、現地での具体的な仕事や応募条件等に関する具体的な質問を受けました。

ボランティアフェア2012

千葉市生涯学習センターにおいてボランティアフェア2012が昨年十一月二十三日(金)〜二十六日(木)にわたり開催されました。



展示ブース開設完了

展示の期間は十三日間でしたが、当会は休日、土、日曜日にはブースに詰めて、シニアボランティア活動に関心を持つ来訪者に対応し、約四十名の方々に海外での活動の内容や応募に際してのポイントなどを説明しました。

国際フェスタCHIBA

昨年十二月二日(日)、千葉県青少年女性会館で開催された国際フェスタCHIBAに当会はブースを開設して参加しました。この催しは千葉コンベンションセンター、JICA地球広場、千葉県ユニセフ協会の主催、千葉県の後

援で開かれたもので、国際協力関係の団体が夫々の活動の展示と相談コーナーを設けて来訪者に対応し、参加ボランティア団体の間での情報交換の場としても有効でした。



役員手作りの展示パネル

浦安市国際交流・協力フェスティバル2013

一月二十日(日)、シヨツパーズプラザ新浦安にて表題のフェスティバルが十三団体参加で開催されました。



一階の当会展示ブース

当会には写真パネルと資料の展示に加えて、国際理解クイ

ズを行い、百名を超える来訪者で賑わいました。また、JICAシニア海外ボランティアの応募相談では十名以上の方々からの熱心な質問に対応しました。

ちば市国際ふれあいフェスティバル2013

二月十七日(日)、ちば市国際ふれあいフェスティバル2013が千葉市の複合文化施設「さぼーる」で開催されました。当会は会場二階にブースを設け、赴任地での活動状況や帰国後のボランティア活動を写真パネルで展示しました。また、ブースでは「国際理解クイズ」を行い、人気を呼びました。

一階ステージで行われた参加団体自己紹介では、当会の酒井國彦幹事夫妻がチュニジアでの赴任体験談を披露しました。



千葉市長のブース来訪を受ける

会員 寄稿

日本のトンガ応援団

吉原久雄
(農業生産技術 印西市)

私の JICA ボランティア参加は、一九七二年協力隊フリリツピン マウンテン州農科大学で「温暖果樹栽培」、その後商社勤務を経て、二〇〇二年シニア海外ボランティアマレーシア農業省 地方開発公社で「有機野菜栽培」、二〇〇六年同じくトルコ アクデニス大学で「日本の作物栽培」、そして二〇一〇年同じくトンガ農業省で「輸出農産物振興」と計四回、八年半であった。表向きは私が指導したことになるが、内実、私が学んだことの方が確実に多い。加えて私は異国で業務と生活を楽しむ、人生が格段に豊かになった。



農業省にてスタッフ達と

トンガから帰国後一年経過、今は「日本のトンガ応援団」として楽しい関係が継続している。二〇一二年五月、第六回太平洋・島サミットに参加のためトンガ首相トウイバカノ卿ご一行来日の折、東京のホテルで首相ご夫妻と鈴木元シニアボランティア (ICT政策 首相府情報通信省)、川奈部元シニアボランティア (日本語教育 教育省) と私がティータイムを楽しんだ。

千葉県 JICA シニアボランティアの会で帰国報告をした。十一月、A 大学で「トンガの暮らしと農業」について講義。Nishi Trading が日本に輸出したカボチャを輸入商社から取り寄せ、学生達が料理して試食した。二〇一三年三月当研究室の教授ら三名がトンガへ学術調査に行く予定で、トンガとの関係はさらに深まるであろう。また、教科書出版会社二社の依頼で「高校地理」教科書用に私のトンガの写真を提供した。

十月、在日トンガ大使館の開設に伴い、元シニア海外ボランティア三人が駐日トンガ王国大使タニア・トゥポウ閣下 (タニアさんとお呼びしている) とランチを一緒にし、大使館業務の応援を申し出た。十二月、トゥポウ閣下が信任状捧呈のために、明治生命館から皇居までを往復する宮内庁の馬車列があったので有志の元ボランティアが取材した。特に動画は安藤、川奈部の元シニア海外ボランティアが撮影し You Tube にアップした。動画と写真を大使館に提供し、トンガ TV で放送され新聞にも掲載され大使から感謝された。



大学でトンガ農業を講義

七月末、カボチャの生産・輸出の実業家 ニシ氏 (Nishi Trading Co. Ltd. 社長 日系三世) と、Tonga Development Bank 総裁 セファナラ氏が来日されたので、ビジネスのアドバイスをし、スカイツリーへ観光案内した。ニシ氏は小生宅に二泊し千葉の園芸を視察し休日を楽しんだ。

八月、JICA 駒ヶ根研修所でシニアボランティア候補生に任国事情を講義。九月、

十月、トルコ アクデニス大学 クルチエフエ学長一行七名が来日、千葉大学との交流事業を進めた。二〇〇九年私は両大学の交流開始のお手伝い



建設中のラ・ユニオン港 (右が筆者)

エルサルバドルにおけるシニアボランティア活動

渡邊要吉 (品質管理 船橋市)

エルサルバドルという国について少し紹介したい。たいいていの人々がエクアドルと間違う。そんなに日本人にとって疎遠な国だったのだからか。サンテクジュペリの「星のお王子様」は知っているがその舞台が作家の妻コンスエロの生まれ故郷エルサルバドルであること、自分たちのこと

という将来の発展への布石を秘め、パナマ運河を補完する頼もしい港である。その後政権の左翼への移行で停滞しているが、船社を始め民間の利用者が動き出している。

二回目は二〇一〇年から二〇一二年で、品質保証の分野で中小企業支援活動であった。勤務地は東部地区四県をカバーする「国家中小零細企業委員会」(CONAMYPE)であった。JICAの品質管理の中心はコスタリカ大学でコースを提供し、内容は経営管理から日々の品質管理に至るものである。しかし、エルサルバドルの中小企業までには手の届かぬ存在である。私がこの国で興味を持ったのは

- ① 黒い食器 (Barro negro)
 - ② 藍染 (Anil)
 - ③ 竜舌蘭の繊維 (Henequen)
- を原料とする麻袋の各生産工程であった。黒い陶器の村は土、日曜日に良く訪問し品質管理の必要



黒い陶器 (Barro negro) の工房

性を話した。藍染については青年隊の専門家を出張指導に派遣してもらったりして、デザイン等大幅に改善した。



藍染

竜舌蘭の麻袋はコーヒー豆に使用され輸出されているが、ISO取得は必須であり経営者もその覚悟を決めたところであった。中米諸国は米国、台湾、EUとの自由貿易協定を進めているが、品質保証制度の導入は急務である。

日本人が他国で業務の指導をするという事は、文化の違い、社会情勢の違いなどから大変難しいことである。我々には計り知れない問題も多く抱えている。これまで多くの青年隊やシニア海外ボランティア達が試行錯誤を繰り返しながらも協力関係を築いて来たことをこの地に来て初めて知った。中米のエルサルバドルは地理的には遠いが、日本とは連綿とした歴史を持つ掛け替えの無い友好国である。

ケニアの通信環境

鈴木伸一
(コンピュータ技術 市川市)

ケニア共和国は赤道直下の国で、日本のほぼ一・五倍の国土に約四千万人が暮らしています。



赤道の看板と筆者

山あり、谷あり、高原ありで多様な気候が存在し、首都であるナイロビは標高が約千六百メートルを超えるため、夏の軽井沢のような気候です。二〇一〇年三月から二年間をJICAのシニア海外ボランティアとしてナイロビ市内の公衆衛生省健康情報部門に赴任しました。各医療機関からのデータを収集・集計し、公開するための仕組みを改善する手助けが任務です。ここでは、この経過の中で感じた通信に関する部分を取り上げてお話しします。サハラ砂漠より南側は、サブサハラと呼ばれ、ここが多くの日本人がイメージする

「アフリカ」です。ケニアは他のアフリカ諸国と異なり地下資源が全くありません。主な輸産品は花卉、コーヒー、紅茶ですが、サブサハラの中では南アフリカに次いで二番目に経済の発展した国になります。

GDPは年率八割くらい成長していますが、格差は広がる一方で、大卒初任給として月収五十万シル(約五千五百米ドル、五十万円)を得る人もいます。一日一米ドル以下の収入しかない貧困者が、一〇年ほど前では国民の約四割をしめ、現在では約五割とさらに増加しています。

電気は安定とされるナイロビ市内でも数時間の停電は当たり前で。雷が鳴ったら、まぐろソクです。大手のビル(おそらく工場でも)では自家発電装置が設置されています。本省の庁舎でも停電対策に二基(交互に運用)が設置されていたにもかかわらず、あるとき三日ほど停電が続き



教室でのトレーニング後の補習

ました。原因は電気代が不足した病院に自家発電から一週間の電気を都合したところ、二基とも故障したということ。ほかにも予備の燃料が不足で、停電してしばらくした時に「燃料がなくなったため、本日の発電は終わり」という事もありました。

郵便事業は衰退する一方で、町中にポスト(あっても「ゴミ箱」になっているのが多い)や郵便局はほとんど見かけません。郵便物の戸別配達が行われないので、私書箱を用意してそこ宛に送るよりほかにありません。

携帯電話が一人一台と思えるくらいに普及して、日本以上に固定電話の回線が急速に使われなくなっています。ホテルや企業の受付番号すら携帯電話にするところが多いのです。原因はアフリカ大陸に足場を築こうとする中国の国際援助で、きめ細かく、携帯電話の中継基地を建設、あるいは増強しています。したがって、無線によるインターネットの接続はほぼ全土をカバーしており、都市部なら7.2Mbps~20Mbpsの速度があります。しかも、千シル(約千円)で1.5GBの通信量が使えます。

帯域管理が杜撰なのか、よく切れたり急に遅くなったりしますが、日本より安くて便利です。インターネット用に

光ケーブル敷設も急ピッチで進んでいます。

また、携帯電話を使って電話間で送金することができ、銀行振り込みより一般的です。携帯電話は日本と同じような後払い契約もあります。が、大多数はスクラッチカード(五シルから千シル)を購入し、その番号でチャージして使うプリペイド方式です。

以上、簡単ですが、ケニアの通信事情の一端を書いてみました。

ネパールに於けるボランティア

花輪淳二
(IT産業育成 千葉市)

首都カトマンズは北緯二十七度(沖縄とほぼ同じ)、標高千四百メートルで冬は氷や雪が降ることがなく、夏はエアコンがなくてもファンのみで生活でき住みやすい気候です。街の印象は舗装されていない小道、小さな個人商店の裸電

球、建築現場での人力による作業など日本の昭和二十年代の情景に似ていて懐かしい感じがしました。国民は確かに経済的には貧しいですが、明るく大家族で助けあって生活していて、精神的には貧しいとは思えず、むしろ豊かではないか感じました。
配属先はネパール・コンピュータ協会で役員はコン

ピュータに関連の会社の経営者たちで、協会の役割はコンピュータの普及を行うことです。最初の会合で活動内容が「ソフトウェア開発における品質管理」の適用事例を示してほしいということ、具体的に品質管理システムを作成するという事に決まりました。

そこで会員のソフトウェア開発会社を訪問してインタビューを行い、品質管理に熱心な経営者の「Professional Computer System」という組織に適用することに決めました。国際規格 ISO 9000 シリーズの理解からはじまり、ソフトウェア開発のプロセスを分析して手続きを決め、最後にソフトウェア開発担当者に作成した品質管理について教育しました。その後その組織は「ISO 9000 品質管理」の認証を取得しました。



品質管理チーム

ネパールでは生野菜、生卵、水道水、清潔でない食事は取らないなど細心の注意を



ネパールの子供たち

払って生活をしたのですが、渡航して一ヶ月もしないうちに今までに経験したことのないひどい下痢にかかってしまいました、自然治癒するまで約3週間かかり五キログラムも痩せ、苦しい思いをしました。「四月のカトマンズは雨季前で気温が高いこと」、「生活や仕事や食事に慣れていないこと」、の理由での疲労が重なり体調を崩したのが原因ではないかと思っています。

半年後には目の周りが腫れあがりそして熱をもつこれもまた日本では経験したことのない病気に罹りました。眼科クリニックの診断では結膜炎?であり抗生物質を服用して治癒しました。健康診断では肺のレントゲンで影が見つかり、CTスキャンによる精密検査で自然治癒した痕と判明し事なきを得、普段から体力を付け免疫力を高めておくことが大事だと思いました。

またアメーバ赤痢という寄生虫も見つかりました。虫下しを服用して完治しましたが、外食が多かったのが原因と考えています。治療済の歯が具合悪くなったので歯科クリニックで見てもらったら抜歯されてしまいました。日本では抜かないで治療してもらえたのではないかと悔いが残ります。発展途上国では衛生状態が悪く、医療レベルも低いのでそれなりのリスクがありますが、大事に至らずに帰国できてよかったです。

二〇〇三年四月に渡航した直後の五月、冒険家の三浦雄一郎さんが七十歳でエベレスト登頂に成功しました。そして今年五月に八十歳で再びエベレストに挑戦する予定と聞いており、陰ながら成功することを祈っています。私も仕事の合間に山岳ガイドとポーターを伴ってヒマラヤのトレッキング(エベレスト、アンナプルナ、ランタン)に行き、ヒマラヤの美しさと自然の厳しさを知りました。ヒマラヤの魅力が忘れられず帰国後も何回かヒマラヤのトレッキングに行っておりま

す。「ソフトウェア開発における品質管理」の作成、ヒマラヤのトレッキングおよび観光、と忙しいが充実した二年間を送ることが出来、人生にとって忘れられないすばらしい経験になりました。

会員動靜

(敬称略)

会員数

(平成十五年二月六日現在)
九十九名

会員異動

(平成十四年六月三十日以降)
入会者 三名
退会者 一名

再派遣者

(平成十五年二月六日現在、派遣順)
児玉 東洋 (ドミニカ共和国)
工業廃水処理 千葉市

大久保 邦衛 (フィジー)
水産物流通改善 浦安市

濱崎 丘 (ベリーズ)
廃棄物処理 柏市

小松 秀世 (エチオピア)
給水施設計画 山武郡

黒須 英典 (メキシコ)
適正製造基準 鎌ヶ谷市

後藤 令子 (マレーシア)
養護 千葉市

渡邊 章 (エチオピア)
保険 (専門家派遣) 松戸市

入会者

川奈部くに子 (トンガ)
日本語教育 船橋市

篠原 温雄 (カンボジア)
教育行政/学校経営 八千代市

田畑 成章 (パラグアイ)
経営管理 柏市

退会会員

武松 敏夫
長いあいだ会の運営に御協力頂き有難うございました。

会員便り

ネパールの三カ月

大西 輝明(浦安市)

はや、一年ほど前になりませんが、ネパールのトリブバン大学から客員研究員の招待状が来たのを幸い、休暇のつもりで出かけてきました、むろん仕事は二の次です。

五月中旬、カトマンズ盆地は年間で最も暑い季節、六月に入ればモンスーンとなつて気温はしだいに下がり、私の帰国する八月中旬には夜間は寒いほどにもなりました。カトマンズは欧米や中国からの旅行者に満ち溢れ、彼らもたらす様々なウイルスと街中の汚染大気、それに加えての寒さ続きと寄る年波のため、体調は終始不良を続けました。現在のネパールの一人あたりのGDPは日本の一割から一・三割程度でしょうが、電力の通電時間は一日数時間、カトマンズの街中は築後なん十年も経過してくすんで朽ちつつあるアパートメントの並び、その間隙を這う破壊した道路網、道行く人々を一顧だにしないバイクと小型タクシーの群れ、大量のほこりと塵芥の無頓着な放置、街路の騒音とスーブニール屋のCDが出す大音声など、これらは途上国の共通項でもありません。そうした喧噪にも拘らず、さらに

異常とも思える過剰な人口密度であるにもかかわらず人々の嬌声や叫び声は聞こえず、行人の呼び声などもひそやかにさりげなく、両手を合わせて挨拶しあう穏やかな物腰などもネパールの人々の温厚、温順、温和な性情を大いにかがわせるものであります。

唯一の国立大学であるトリブバン大学は各地域に「支大学」を持つタコ足大学です。カトマンズに隣接するキルティプルに中央の大学があり、支大学を出た学生はこの中央の大学へ進学して修士課程を修めるということになっています。



トリブバン大学正門

大学の正門は横幅五層ほどのコンクリート製のアーチでできており、張り紙や落書きの後ろに「トリブバン大学」と書かれたトタン板様の大きな表札をかかげてあります。私の属した数学科では一学年

二百人ほどが在籍し、「修士論文を指導するのが、これまた大変なんだよ」と同僚の先生がぼやいていました。大学の先生の給料は二万五千円ほどで、私立大学と掛け持ちしなければ生活できないとも話していました。



同僚夫妻と共に

私はこの大学院大学で予備調査を、さらにカトマンズ市内のいくつかの大学で本調査をすること、ネパールの大学生の価値観や環境に係る意識の調査、およびその周辺の文献調査を行う名目で三カ月間を過ごしました。

学生や先生方の協力により有益なデータも得られました。が、わが国や他の途上国の学生の反応とは異なる結果も見られ、人々の世界観やものの見方がいかに人々の生活や歴史、宗教、教育などに支配されて変わるものであるかを実感するに至りました。



意識調査中のトリブバン大学教室

この調査で「ネパールを今のネパールとは異なる、理想的な国にした」と答えた学生は全体の約四分の三、「では、理想的な国とはどこか」との質問に対して最も多かったのは「日本」でした。我々日本人は一体、彼らの期待に沿う存在であるのか、彼らに手を差し伸べられる存在であるのか、考えさせられる結果でもありました。

昔取った杵柄

「スリランカ硅石調査」

品川 洋之助(鎌ヶ谷市)

経緯

一昨年秋、当会の「概要」をご覧になった石沢正義氏(一般社団法人スリランカ基金制度及び同J&S事業支援センター代表理事)から、当会にスリランカの硅石開発に関し協力出来る人材の問い合わせがあり、パラグアイで鉱物資源調査・開発に携わった小

生が推薦されました。石沢氏は千葉大で留学生と共に人の認証システムの開発研究を進める一方、その関連特許収入でスリランカ留学生が帰国後自立できるような、鉱山の開発、農業分野の開発援助を考えておられます。



KANDY植物園にて

硅石はスリランカの有望な鉱物資源で、日本にとって一つのソースになる意味があること、原石の輸出税が上がり現地加工が必要になったこと、同国への中国の熱心な進出ぶりから硅石資源の開発にも参加が考えられること、などが石沢氏の企画の背景となつていようです。

スリランカの硅石

スリランカには先カンブリア時代の熱水鉱床としての石英脈があり、生成時代が古いため含有鉱物の放射能が減衰しており、純度が高い良質のものが多く、又岩脈としては規模の大きいものもありま

す。産出場所は同国南部高地帯で、宝石産出地の東部にあたり、産地は点在し小規模に露天掘り採掘をされているのが現状です。



硅石の露頭

現地採掘会社「WOOLIM LANKA(PVT) LTD」に対する原石粉碎工場と関連採掘に関するコンサルタン卜業務として技術援助を進めております。今回の現地調査はWOOLIMが必要経費を負担し、十月二十七日出国、二十九、三十日の二日間で工場及び三カ所の硅石露頭視察、十一月五日帰国の日程で行われました。この時期の現地は雨季で、両日とも雨に降られました。限られた時間での雨の中の最初の予察調査でしたが、開発の問題点が分かるなど一応の成果を得ました。
スリランカとの関係
小生は個人的にスリランカとは縁が深く、家内の随伴家族として二〇〇三年九月より

九カ月間コロンボに滞在し、宝石、硅石などの産地に近い南東部サバラガムワ大学を訪問したこと、また中央部の仏教遺跡、キャンデイの仏歯寺、シーギリヤのフラスコ絵など、家族旅行した土地勘があったことが今回の調査に役立ちました。また家内が再度二〇〇五年三月より八月までJICAのシニアボランティア短期派遣でサラバガムワ大学に赴任し、日本語教育関係の人脈が増えていることも有益でした。

野外地質調査はシニア海外ボランティアとしてパラグアイに赴任して以来で、「昔取った杵柄」の覚悟で現場に臨み、レポート作成し終えるとホツとし、「雀百まで踊り忘れず」と思いました。この機会が与えられたことに感謝し、何よりもこの話が当会の「概要」の効果から始まり、会の将来の活動幅の広がりにつながると期待してうれしく思っております。

南米の日系社会で暮らして

村田 淑子 (船橋市)

私はブラジル北部、アマゾン川河口の町ベレンと、パラグアイのアスンシオンに、日系社会シニアとしてそれぞれ二年間派遣されました。去年三月からは個人ボランティアとして、パラグアイのエステ

市に滞在しました。ポルトガル語もスペイン語もろくに話せないまま、どっぷりと南米の日系社会で五年近く暮らしました。なぜ私はこんなにも日系社会にはまっていますか。南米大陸に昭和三十年代のまま「ALWAYS三丁目の夕日」の世界があったからです。

ブラジルでもパラグアイでも、日本語教師としての活動はほぼ変わらず、日本人会組織のもと、日本語教育の普及と指導にあたることでした。パラグアイではアスンシオンに「パラグアイ日本人連合会」があります。その傘下の十校の日本語学校を対象に、新人日本語教師の養成、現職教師のレベルアップのための各種研修会、日本語学校巡回指導、作文・スピーチコンテスト実施、教科書教案・教材作成などをしました。



エステ日本語学校の生徒と教師

三カ月に一度くらいは各地の日本語学校を訪問しました

が、この巡回が一番大変でした。移動手段はバスしかありません。移住地を結ぶ路線バスはオンボロで、トイレもなく、床の隙間から走っている地面が見えるものもあります。そんなバスに四時間も五時間もゆられていくので、出張の日には朝から水分も制限です。

でもおかげで、パラグアイの全ての移住地を回ることで、その土地の方々と親しくなり、彼らの生活をつぶさに知ることができました。

ホテルのない移住地では、日系人のお宅に何回も泊めて頂きました。インフラ面での問題はありますが、どのお宅も立派で、台所には大型冷凍庫がいくつもありません。衛星放送が見られますので、朝の四時から大相撲の中継を、お昼には朝の連続ドラマを楽しみにしている方が多くおられました。味噌、こんにゃく、さつま揚げなどが家庭で手作りされ、しつかり日本の味が受け継がれていました。何か行事があるたびに、婦人会の人たちは総出で、これらの日本食を作ります。東日本震災の時も、日本在住の親戚と連絡を取り合い、各日本人会は義援金を集めて大使館に届けました。家族みんなが互いに助け合う姿、社会の基本単位としての家族がそこにはありました。それは私が子ども頃の日本の姿でもありません。

す。これまで南米の日系社会で、日本語学校は大切な役割を果たしてきました。保護者は子どもが日本語を学ぶだけでなく、日本の文化に親しみ、日本的な良い習慣を身につけてほしいと願っています。言葉の心の支えとする日系人の思いがひたすらに守られてきたのですが、今や転換の危機にきています。家庭で日本語を話す生徒は減り、またそれを教える教師も絶対的に不足しています。もう一方で保健医療や社会福祉などの面で日本語による支援を必要とする高齢者たちがまだ居ます。また、子どもたちも日本語教育を通じて自分のルーツを見つめ、民族的なアイデンティティを確立していく必要があります。



茶道教室

これからの課題は日本語学校が単なる語学学校ではなく、日本語の継承と普及の二本だてで現地社会に貢献することだと私は思います。

新SV千葉県庁表敬訪問

昨年九月十八日(火)午後、JICA地球ひろば地域連携課 藤井敬太郎企画役の引率で、平成二十四年度第二次隊の青年海外協力隊員十名およびシニア海外ボランティアの阿部勝則、中西陽典、吉田知弘の三名の方々が千葉県庁を表敬訪問し、千葉県総合企画部 平井俊行部長の激励を受けられました。

当会からは、及川淳一副会長が同席しました。



第二次隊の皆さん(中央 平井俊行部長)

同じく十二月十八日(火)午前、JICA地球ひろばNGO連携課 内藤 徹 課長の引率で、平成二十四年度第三次隊の青年海外協力隊十二名およびシニア海外ボランティア 伊藤義博、荻原千佳、羽計

誕、高瀬義彦、鈴木隆夫、岩井公男、坂東雅邦、長尾和行の八名の方々が千葉県庁を表敬訪問し千葉県総合企画部 平井俊行部長の激励を受けられました。



第三次隊の皆さん(中央 平井俊行部長)

当会からは、津田正臣事務局長が同席しました。

当会創立十周年記念行事のお知らせ

五月十六日(木)の通常総会の当日、当会創立十周年記念行事として公開講演会と和太鼓 TAWOO L I V E を併せて企画しております。TAWOOには当会の設立を支援された元JICA千葉デスク塩沢かおりさんがメンバーになっておられます。皆さん奮って公開講演会と演奏会にご参加ください。

平成二十五年春募集 説明会のお知らせ

JICAシニア海外ボランティアおよび青年海外協力隊の春募集説明会が左記の通り開催されます。会場ではパネリストによる体験談発表や、よろず相談があります。

三月二十八日(木曜日) 千葉会場 (千葉市生涯学習センター大研修室) 千葉駅徒歩五分

シニア海外ボランティア 青年海外協力隊(合同) 四月十一日(木曜日) 船橋会場(きららホール) フェイスビル五階 船橋駅徒歩二分

シニア海外ボランティア 青年海外協力隊 四月十八日(木曜日) 柏会場(アミューゼ柏プラザ) 柏駅徒歩七分

シニア海外ボランティア 青年海外協力隊 各説明会へのご参加は、会場に直接お越しください。JICAボランティアに関心のある皆様をお待ちしております。

JICA地球ひろば便り

既にご存知の方も多いと思いますが、JICA地球ひろばはJICA市ヶ谷ビル内に移転し、平成二十四年十月一日にリニューアルオープンいたしました。



地球ひろば 体験ゾーン

広尾時代と比べると体験ゾーンやセミナールームなどが狭くなっており、ご不便をお掛けすることも多いと思っております。日々改善を重ねていくところです。

市ヶ谷を新たな市民参加事業の拠点にすべく、スタッフ一同頑張っておりますので、引き続きどうぞよろしくお願ひいたします。ぜひ、新しくなった地球ひろばにお越しください!

JICA地球ひろば 渋谷 明日香

編集後記

東アジアではほぼ二〇〇年周期で温暖化と寒冷化とを繰り返してきました。現在は十九世紀後半から始まった温暖化の渦中にあり、これに温室効果ガスや都市化による温度上昇が加わって、わが国の大気温度は近年、著しい変動状態にあります。ここ百年間では、京都における三月の平均気温は約年三度も上昇しました。このため明治初年と比較して桜の開花日は約十日早まり、スイセンやノフジなどの開花の早まり、モミジやイチョウの紅葉日の遅れ、渡り鳥の渡りの時期の変動などとも相俟って、季節感喪失の心配さえ感じられます。しかし、これは環境変化に対する生物の速やかな適応をも意味するので、季節感喪失は却って生物の健全性を示すものであるとも言えましょう。では、人類は環境や社会の変化に柔軟に適応できるかどうか、難しいところですね。(大西 輝明)

ご意見、ちば出前講座のお問い合わせは下記にお願いします。

千葉県JICAシニアボランティアの会 (The Association of JICA Senior Volunteers in Chiba)

043-255-3810 (山本) Shigeho_yamamoto@yahoo.co.jp

千葉デスク国際協力推進員 043-297-0245 (田村) jicadpd-desk-chibaken@jica.go.jp